

変わり続け、問い続ける、 「異人」＝「よそ者」という存在

地域・コミュニティをつなぐ存在として、今あらためて「よそ者」の力が注目を集めている。が、ひと口に「よそ者」といっても、そのあり方はじつに多様で捉えどころがない。ウチとソトを自在に行き来し、人と人の新たな結びつきを生み出す、「よそ者」の役割とは何か？ 異人・境界・排除などの概念をアクトチュアルな視点から問い直してきた赤坂憲雄さんに、うつり変わる「よそ者」観、それがこれからの日本にもたらすものについてお話を伺った。

脇坂敦史「取材執筆」
栗原論「撮影」



インタビュー

「学習院大学文学部日本語日本文学専攻教授」

赤坂憲雄

Akasaka Norio

「ウチとソト」に
引き裂かれた自己を見つめて

『異人論序説』（1985年）を書いた1980年代半ば、私はちょうど30歳くらいでした。民俗学や国文学、宗教学や社会学、現代思想などさまざまなテクストのなかに「ウチとソト」「秩序と混沌」「清浄と不浄」「自己と他者」といった二元論を見出し、その境界や交わりに豊かな物語を発見しようとしたこの本は私にとって、さまざまな意味で出発点となりました。

私のなかには若い感覚として、自分が生きていることの窮屈さとか居心地の悪さがあり、それを解きほぐ

してみたかった。自分は「よそ者」（ストレンジャー）ではないか？という違和感。『異人論序説』のなかで繰り返し描いた、両義的な、「ウチとソト」に引き裂かれた存在としての「異人」（図1）には、そういう自分の不安定さが投影されていたと思います。

続編として『排除の現象学』（1986年）を書いたときにも、同じような感覚が色濃くありました。私の暮らしていた武蔵野は都市化の進む東京のウチとソトが接する境界として、「三億円事件」（68年）や「イエスの方舟事件」（79〜80年）など特異な事件の現場にもなりました。この本のなかでは、新聞をにぎわす

そうした社会問題の輪郭を描きながら、「排除の論理」を強めるコミュニティのあり方、それに追い詰められた異人たちのあり方を、さまざまな角度から考察しています。

たとえば、埼玉県の国有林に建設計画が進められていた自閉症者のための施設に、隣接するニュータウンの住民から反対運動が起きたという事件を取り上げました。現代にも通じる、先駆的な事例です。注目したのは、ニュータウン住民の過剰とも思える拒否反応に対し、もっと古くからそこに住んでいた「旧住民」の側がむしろ受容的だったという事実。すでにニュータウンという巨大な「異物」を抱え込んでしまった彼らにとって、新しい施設がひとつ増えても、それほど大きな問題ではなかったのです。さらに、地価や資産価値の低下といったニュータウン住民の懸念のなかに、いずれ自分と家族はその家と土地を売ってどこかに移住していききたいという、定住とは矛盾した願望があることにも驚きました。

「ウチとソト」「排除する側とされる側」の関係はこのように複雑であり、ねじれていて、常に当事者が引き裂かれている。それを丁寧に解きほぐすことは重要な意味をもっています。今でもそれは同じように感じています。

東北で出会った、
共同体の内なる「よそ者」たち

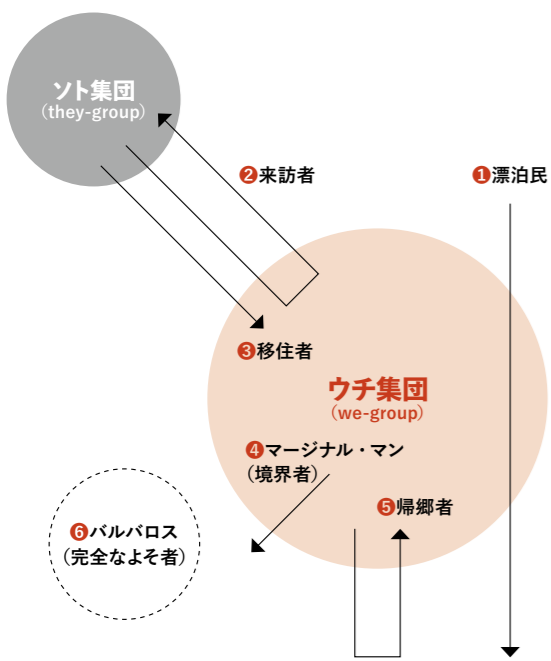
ふたつの著作を書くことで見えたことは、たくさんありました。ただ、どこかでそれを超えたい、そこで得た視点を崩したいという感覚も強くなりました。だから1992年に東北に新しくできた大学から「教員にならないか」という誘いがあったとき、私はふたつ返事でそれに乗ったのです。

東北を選んだ理由のひとつは、私の父がかつて福島県で炭焼きや山師「*1」の仕事をしていたことに関係します。父は生まれ故郷を追われるように東京へ出てきました。父の人生の背後に見え隠れしているものを、自分の目で確認してみたい。結果として、東北の村や町に入って聞き書きをするという仕事を20年間にわたって続けることになりました。

父や家族の話のなかには、田んぼというものが出てきたことがありません。くわえて、私が育った東京の武蔵野台地も畑作地帯。自分の原風景のなかには田んぼというものはない。後知恵ではありますが、それがやがて非水田的なものにこだわった私自身の「東北学」へとつながっていったように思います。

武蔵野は父のように故郷を捨てて移り住んできた人たちが大多数を占

■図1：「異人＝よそ者」のさまざまな形



『異人論序説』に掲載の、漂泊と定住から分類した共同体と異人（よそ者）の関係（一部改変）。①一時的に交渉をもつ芸能者・遊行の宗教者・渡り職人など、②行商人・旅人・巡礼者・赴任者など他集団からの訪問者、③移民・嫁や婿・転入者などの移住者、④掟を破った者など秩序の周縁に追いやられた人々、⑤故郷へ帰る旅人など外の世界からの帰還者、⑥共同体とは無縁の完全な「よそ者」。



める、いわば「移民の大地」です。成功者たちが屋敷を構える東京の中心部と違い、周縁化された「よそ者」たちが集まってくる。彼らは土地の歴史や文化についても知らないし、語らない。私を含め、武蔵野を故郷だと思っている人はあまりいないし、距離感があるのです。

だから、東北で「根っこがあった、その地に足をつけて暮らしている人たち」に話を聞くことが楽しかった。自分が安心して「よそ者」になれることにも、解放感があった。「よそ者」として村や町を訪ね、おじいちゃん、おばあちゃんの話聞く。土地ごとに祭りのある世界をあらためて知り、山野河海*2と交わりながら組み立てられている暮らしの風景はいいなあ、と心から思ったのです。

その後、東日本大震災の2カ月前に東北を離れた私は、約20年ぶりで武蔵野に戻ってきました。今もさまざまな形で東北とのつながりを持ち、東北に関係する仕事も続けていますが、離れてみて気づくことも多くあります。

思い返してみると、もともと土地の古い話は「村の旧家」や「根っこ」があって、その地に足をつけて暮らしている人たちがよく知っている、という一般的なイメージが私のなかにあったと思います。しかし、実は

をもつようになる。そうすることが自分たちの共同性をより強固にすることにもなるからです。柳田国男も言っていることですが、中世から近世にかけて村の周縁に定着した人たちが被差別民の起源のひとつとなっていく背景には、こうした強い定住化への傾斜があったと思います。

そして戦後の農村も、定住的な共同体としての力が弱まっていたとはいえ、長い間にわたり相互扶助と排除の原理を同時に抱え込んでいました。だからこそ、たとえば社会学者の鶴見和子さんが強調されたように、共同体にとっての「内発的発展」を促すような、いわば「よそ者の効用」も考えられた。私自身も『異人論序説』を書いているとき、そうい

そういう人たちの語る歴史というのは公式的で、かたよっていることも多い。だから意図したわけではないのですが、いつのまにか「よそ者性」を強くもつ人たちの話に耳を傾けていることが多かったんです。

最上川に面する小外川という集落に暮らしていた加藤さんという方も、そんなおひとりでした。1960年代以降に離村が進み、もはや2人の老人が暮らすだけだったその村は、消え失せる運命にありました。彼がそこに婿養子としてやってきたのは50年ほど前。しかし加藤さんが語るかつての村の姿には、中世以来の歴史をもつ「川の民」、川に漁る漁民が生きていました。それは、『奥の細道』でそこを通過した松尾芭蕉がけっして語ろうとしなかった「もうひとつの東北」でもあったのです。

とりわけ深く印象に残っているのは、女性たちです。考えてみると、女性たちの多くはよそから嫁入りしてそこにやってくる。結婚するとき、「もうお前は二度と帰ってくるな」と言われ新しい土地に移住してきているのです。

「〇〇さんの故郷はどこですか?」「〇〇さんにとって故郷は何ですか」という質問を投げかけると体が強ばってしまい、答えることができない。そんな女性に出会ったときのことは忘れられません。村社会におい

うイメージをもっていました。けれども今や、定住共同体が存在するという前提自体が幻想だと思った方がよいのかもしれない。

かつての東北では、家督を継ぐべき長男と次男以下の間に圧倒的な格差がありました。長男以外が家に残った場合は「おじ」、女なら「おば」と呼ばれ、薄汚い格好で働かされて馬小屋に寝起きしていたりする。私にとってそれは、今村昌平監督の映画『楢山節考』(1983年)で左とん平さんが見事に演じていた利助という男のイメージです。彼は村人から「くされ」などとさげすまれ、中年になっても童貞の彼は日々性欲に悩まされていきました。

しかし時代が下がると、高度経済

で、そもそも女性は「よそ者」であり続けていたのだ、と気づきました。彼女たちにとっての故郷はまさに、引き裂かれていたのだと思います。

東北の小さな村といっても、均質ではない。入ってきたばかりの人もいるし、家族のなかに村を出てしまった人がいることも多い。私のような「よそ者」にとっても最初はみんな「村の人」ですが、それはこちらが気づいていなかっただけです。東北は、私の父のように村を捨てて都会へ出ていった人たちはもちろん、北海道や戦前の満洲、ハワイへ移民したという家族も多く、そこから帰ってきた人たちもいる。

民俗学においても、従来は「漂泊と定住*3」という対比的な二元論を語ってきましたが、それほど単純な図式では語り尽くせないグラデーションがあったのです。

共同体を出た者は不幸になる、という「呪い」

たしかに、今も地方で発言権をもっているのは、代々その名が村に伝わっているような「定住者」でしょう。そしてそこには、掟に従わない者、「よそ者」を排除するような論理も強く残っています。実際には「よそ者」が出たり入ったりするのが当たり前なのに、なぜそれを覆い隠すような「定住の村」というイ

成長期の集団就職などで、そういうマジナル(境界・周縁的)な存在は次々と外へ出ていってしまう。なかには、都会で功成り名を遂げて村に帰ってくる者もいます。逆に、残された長男は家屋敷と田んぼがあっても嫁は来てくれずに鬱々としていたり。今では、関係は完全に逆転してしまいました。

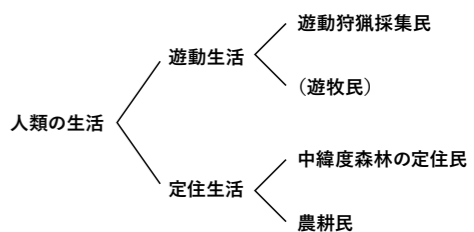
地域社会が人を縛る力というのは、「掟を守り、やるべきことをやれば、必ずお前を助ける」という関係です。柳田国男の言葉を借りれば、それは「村の共産制」であり、メンバーとして入会地*4の利用権をもたなければ、村で暮らしていくこともできません。

そういう共同体の力は、今や壊れてしまったにもかかわらず、吉本隆明さんが著書『共同幻想論』(1968年)などに言うところの「恐怖の共同性」はなおも人々を脅かし続けている。それは「ここを出た者は必ず不幸になる」という、ある種の「呪い」です。その呪いは、今も繰り返しかけられているのです。

「逃げられる社会」から「逃げられない社会」へ

人類学者の西田正規さんが面白いことを語っています。人類が「遊動」から「定住」へと生活のスタイルを大きく変えた「定住革命」の始

■図2：遊動から定住による生活様式の変化



遊動から定住への革命が起こったことで、人類は新たな問題と直面し「逃げられない社会」を構成することになった。出典／『人類史のなかの定住革命』西田正規

メーが、これほどに強いのでしょうか?

中世までの日本の社会は、移動する人たちの多い世界だったと思います。少しずつ定住性の強い村がつくられていきますが、歴史学者の網野善彦さんが描いたように、それはまだ漂泊性の高いコミュニティでした。網野さんは『無縁・公界・楽』(1978年)という本のなかで、そんな中世をある意味で「希望」として描かれていると思います。共同体の隙間にアウトローたちの小さなユートピア(アジュール)聖域、無縁の者が集う場)が生まれており、そこに自由があったというようなイメージです。

しかし戦国時代を経て、近世の定住的な共同体はよそからくる人たちにに対し、ある種の差別的なまなざしをもちます。つまりは1万年ほど前ですが、それは「逃げられる社会」から「逃げられない社会」への転換であるということです(4頁の図2)。

たとえば死体をどこに埋葬するか、ゴミをどこに処理するかというのは、定住とともに人類が初めて直面した問題です。集団のあり方についても、同じことが言えます。遊動する人たちは、離れる、分かれる、去る、捨てる……離合集散というものを当たり前に受け入れていました。ところが、同じ場所に住みつづける社会においては、さまざまなトラブルが起こるし、嫌な人間とも一緒に暮らす方が食べものが少ないとか、そういうことが見えてしまう世界では、掟やしきたりをつくり、メンバーの欲望をコントロールしなければ共同体が壊れてしまう。「逃げられない社会」は、そのようにつくられていったわけです。

同じように、『異人論序説』のなかで私が描いた定住と漂泊のせめぎ合いも、この大きな1万年のスケールで考えてみると、ちょっと違って見えないだろうか。西田さんの『人類史のなかの定住革命』(原題『定住革命』、1986年)を読んで、私は「逃げられない社会」が今、柔らかなく壊れはじめているのではないかと、思うようになりました。もちろん、

なくてはならない存在にまで育っています。

かつての村には、志や思いを共有する人たちが応援し合う形でお金を出す「頼母子」や各種の「講」[*5]というシステムがあり、柳田国男はそこに「村の共産制」の痕跡を見ました。今ならネットを通じ、その仕組みを内から外へと開かれた形で再編していくこともできる。それだけですべてがまかなえるわけではないにせよ、遠くにいる「誰か」が利益をすべて奪っていったり、「誰か」がすべてを抱え込んだりする形ではなくなりません。

海も川も太陽も風も、誰のもでもない。ある意味で、それは先にあげた「入会」です。柳田もまた、そういう協同組合的な考え方を広めようとしていた人物であったことは、あまり理解されていません。ネットを通じた現代の頼母子から始まる、新しい地域社会の仕組み。それも排他的に閉じるのではなく、「よそ者」に対しても徹底的に開かれた形をもたせる——そういう試みが今、あちこちで小さな新しい風景をつくりつつあると感じています。

従来の「閉じられた社会」と「開かれた社会」という対比の上に、「逃げられる社会」から「逃げられない社会」へ、という大きな歴史の流れを重ね合わせる。すると、すべ

てが「自分ごと」として考えられるのではないのでしょうか。今、そういう新しい意識をもち、企業のみならず窮屈な思いをするよりも自分で生きることを選びたい、と地方へ向かう若者たちが増えています。

遠野市で現代のアジールをつくる試み

私が関わりをもっている岩手県遠野市のような地方都市にも、大都市からやってきたそんな若くて優秀な人たちがたくさんいて、とりわけ30代の女性の活躍が目立ちます。なかには国立大学の大学院を卒業して一流企業や官庁、海外協力隊などで働いた経験をもつ人もいます。いわゆる「ロスジェネ世代」である彼らはインターネットを駆使し、自分がやりたいことを受け止めてくれる土地がどこにあるのかを徹底的に調べ、遠野のような町へやってきます。「逃げられない社会」に入れてもらえなかったというマイナスの意識ではなく、みずから積極的に、覚悟を決めて地方を選ぶ人たちが現れているのです。

たとえば2009年度に総務省によって制度化された「地域おこし協力隊」として、多くの若い人たちが全国の自治体に派遣されています。これは地域外の「よそ者」を積極的に受け入れ、地域協力活動を行っている場所が、いたるところにつくられるようになれば、日本も変わっていくでしょう。

多様性を柔らかく受け入れるためのレッスン

私が「東北学」を通してやろうとしていたのは、閉じられたイメージで語られることの多い東北を、開かれたものとして捉え直すことでした。それは日本がもつ複数性、多様性を柔らかく受け入れるための「内なる異質性」と共存していくためのレッスンでもあったと今では思っています。個人も地域も、そんなレッスンを地道に繰り返すことで、外の人の、外の世界ともうまくつながることができるのではないのでしょうか。

海に向こうの台湾や朝鮮半島、中国や東南アジアとの関係づくりに、かつての日本は失敗したと思います。もしかしたらその原型が、これまでの東北との関係のなかにあるかもしれない。あるいは北海道のアイヌ、沖縄の歴史にもあるかもしれない。そういう連続したグラデーションのなかで現実を見ていくことが、これからさらに多様な「逃げられる社会」を生きるうえで大切な学びになるのではないのでしょうか。ウチにしろソトにしろ、もはや「閉じたアイデンティティ」ではやっていけない。では「開かれたアイデンティ

もらい、その定住・定着を図ることが目的ですが、残念ながらうまくいっていないことも多い。

彼ら若者たちを眺めている地域の人たちのまなざしというのが、「よそ者」として20年を東北で過ごした私には、痛いほどわかるのです。つまり2年、3年という限られた時間のなかであれば、「やんちゃ」をしても泳がせておく。面白いじゃないか、と言ってももらえる。けれどもある一線を越え、地域社会の「利権構造」にまで触れてしまった瞬間、手のひらを返したように切り捨てられてしまう……。

でも私は、そういう若者たちを本当の意味で取り込んで、生かしている村や町しか、もはや生き残ることはできないだろう、と思います。

民俗芸能が好例です。村が衰えていくと担い手がない。「よそ者」にもそれを解放し、かつては「穢れ」とされた女性にも入ってもらわないと続けれない。実際、若い女性たちが仲間に入ったところは、よみがえっています。じいちゃんたちにしても、彼女たちが仲間になってくれれば嬉しいし、その喜びがきっかけになり、どんどん「よそ者」を受け入れて元気になる。

その意味で、「地域おこし協力隊」も使い方ひとつだと思います。彼らがいなければできないこともたくさんあり、それが育ったこの地域の風土や歴史をしっかりと捉え直してみたいと考え、「武蔵野学」に取り組んでいます。「よそ者」ばかりが暮らすこの武蔵野という地域を、いわば自分の故郷としてしっかりと描いていくこと。そういう意味で、私はいまだに『異人論序説』のなかで発した若き日の問いかけの影響下にいるのかもしれない。

「テイ」は、どうやってデザインしていくことができるのか？
そうした大きな関心のなかで私は今、自分が育ったこの地域の風土や歴史をしっかりと捉え直してみたいと考え、「武蔵野学」に取り組んでいます。「よそ者」ばかりが暮らすこの武蔵野という地域を、いわば自分の故郷としてしっかりと描いていくこと。そういう意味で、私はいまだに『異人論序説』のなかで発した若き日の問いかけの影響下にいるのかもしれない。

- *1 山を歩き回って立木の売買や鉱脈探しを行う職業のこと。
- *2 定住民により耕作、貢納が行われる荘園や農地を取り巻く山や原野、川や海。
- *3 農耕を基礎として一カ所に定住する人々に対し、山の民や川の民、芸能者、行商人、遊行の宗教者など、一所不住の人々が漂泊者とされる。
- *4 村などの共同体全体で所有した土地で、薪炭や肥料用の落ち葉を拾う入会の山などのことを指す。
- *5 頼母子は構成員である個人や法人が定められた金品を払い込み、融通し合う金融の形態で、主体となる相互扶助的な団体や会合が講と呼ばれた。

赤坂憲雄 あかさか・のりお
 学習院大学文学部日本語日本文学専攻教授。1953年生まれ。東京大学文学部卒業。東北芸術工科大学教養部教授、同東北文化研究センター所長を経て2011年から現職。「東北学」をはじめとする独自の視点から幅広い執筆・発言を行う。著書に『異人論序説』『排除の現象学』（ともにちくま学芸文庫）、「東北学／もうひとつの東北」(講談社学術文庫)、『性食考』(岩波書店)、『武蔵野をよむ』(岩波新書)など多数ある。




遠野でも「地域おこし協力隊」の若者による活動が静かに、しかし確実に浸透しつつある。「to know (トゥーノウ=遠野)」と題した一連のプロジェクトでは、東北の地域文化を現代に生きる人々の糧とすべく企画やデザイン、ツーリズムを数多く実施。遠野中学校1年生130人に向けた講義では「遠野の魅力」を共に考え(上)、遠野の民俗と伝説に触れるツアーには県外からも多くの参加者が訪れた(下)。写真提供/富川岳

るのです。うまくいかないと嘆くよりも、成功例をつくっていった方が早い。私も遠野市で「つなぎ役」をしながら、そういう若者たちが残れるための場所をつくり、ささやかに応援していこうと思っています。

遠野にもむかし映画館があったのですが、私はその古いビルのことがずっと気になっていました。10年くらい前までフィリピン・パプなどが入っていたという建物を借りて、私たちは「遠野文化倶楽

部」というサロンをつくることにしたのです。行政から離れ、利害関係のない、自由に開かれた形で運営し、そこで映画を見たり、コンサートを開いたりする。おおげさに言えば、それは現代におけるささやかなアジールといえます。

都会からあえて移ってきた若い人たちがもつ、新しい感性やノウハウがあるからこそ、こうした場所は魅力的になるだろうと私は感じています。そういうアジールの